

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00341

研究課題名（和文）『河海抄』の生きた歴史空間

研究課題名（英文）A living historical space of Kakaisho

研究代表者

吉森 佳奈子（Yoshimori, Kanako）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10302829

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：『河海抄』（四辻善成。『源氏物語』全巻注釈の早い例）は、近時、人文学全体にわたる多彩な価値を持つことが、日本の国内外を問わず注目されるようになり、『源氏物語』注釈書としての意味にとどまらない広い視座による研究が俟たれる状況にある。そのようななかで、本研究は、虚構の物語作品の享受史が各時代の歴史認識の形成に深く関わっているという独創的な見通しを基盤とし、従来、『源氏物語』研究からも、歴史研究からも留意されることのなかった資料、とくに近世末期の各藩の士族の師弟の教育にかかわる資料に注目した研究を行うことで、日本文学、日本語学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな創造的視点を提示する成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究計画の五年間の研究は、『源氏物語』の注釈史を、延宝年間の出版文化から顧み、さらに従来の研究では、関連がまったく見られることのなかった士族の師弟の教育現場において『河海抄』が、『源氏物語』注釈であることを離れてインデクス化され、教材化されていた実態から、注の意味の見だし方の変化についてあきらかにすることをこころみたまものである。

日本の文化的資産が世界の学問レベルで注目を集めようとする現状にあって、入念な基礎研究に支えられた独創的な視座を提示することは重要な責務であることにたいして十分な貢献をし得たと確信し、いっそうの学術的、社会的意義の発信を行うことを目指す研究を継続する。

研究成果の概要（英文）："Kakaisho" (Yoshinari Yotsutsuji) has recently been attracting attention both in Japan and abroad for its diverse value across the humanities. There is a need for research from a broader perspective that goes beyond its meaning as a commentary on The Tale of Genji. Under these circumstances, this research is based on the original perspective that the history of the enjoyment of fictional narrative works is deeply involved in the formation of historical understanding in each era, and is based on the original perspective that historical research has by conducting research that focuses on materials that have not been given much attention since then, especially materials related to the education of masters and disciples of the samurai class of each feudal domain at the end of the early modern period, we will expand the field of Japanese literature, Japanese language studies, Japanese history, and history of Japanese thought. We obtained results that present a new creative perspective.

研究分野：日本文学史

キーワード：『河海抄』 『花鳥余情』 『河海抄類字』 『湖月抄』 『一代要記』 南葵文庫 花廼家文庫 『源氏物語』

## 1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』の全巻注釈の早い例である『河海抄』(四辻善成著、南北朝期の成立)は、近時、日本の国内外を問わず、歴史学、思想等、人文学全体にわたる価値が目されるようになり、『源氏物語』注釈書としての意味にとどまらない広い視座による研究が俟たれる状況にあった。

研究代表者は、夙に、単著『『河海抄』の『源氏物語』』(2003年、第6回紫式部学術賞受賞。2018年オンデマンド再販)を公刊、平成22年度から平成24年度には、「年代記類の生成と『源氏物語』注釈所引の歴史記述に関する研究」、平成25年度から平成27年度には、「年代記類がつくる歴史世界のなかの『河海抄』」、平成28年度から平成30年度には、「年代記類の世界と『河海抄』の空間」というテーマで科学研究補助金の支援も受けながら精力的な研究を行っており、この状況にかんして、牽引役となる視座を提案しつつけている。その過程で、『源氏物語』の注釈史が、六国史後、官撰国史の編纂のとだえた日本において歴史認識はどのように構成されたかを解明する生きた資料の集積であることに留意するようになった。その成果は日本文学の分野のみならず歴史学の分野からも注目されており、また、海外からの、研究指導や論文執筆依頼を受けるようになるに至り、さらに発展的な研究に向かい、国際レベルでの貢献を行うべく本研究計画を企図した。

## 2. 研究の目的

従来の日本文学研究において、注釈書は、作品をよみ、理解するための補助的役割を担うものと見なされ、必要に応じて部分的に参照され、その全体像や思想史的意義については留意されることがなかった。また一方で、歴史学研究では、物語作品である『源氏物語』とその注釈史が研究対象とされなかった。そのような状況にあって研究代表者は、『源氏物語』をなりたせた知の系譜という視座で『源氏物語』注釈史に注目して斬新な方法論を提示しつつきており、本研究課題においても、虚構である物語作品が生きてきた空間が、同時代の歴史記述の形成に深くかかわっているという独創的な見とおしに基づき、資料の文献学的な精査とあわせ、発展的に研究を継続することで、日本文学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな視点を提示することをめざす。

さらに、『河海抄』の文献学的研究をすすめる。中世、近世において共有された教養の基盤が生成された現場として『河海抄』を捉えだす視座を提案することで、善本はないと指摘されつづけ、本文研究が一定以上にすすまない現状を打開し得ると考える。

単著書の研究以来のテーマである、平安時代末から近世にかけての人々の知の現場としての『源氏物語』注釈史を捉えなおす研究を、文献学的な問題、学問の枠組みの問題もあわせ、より広汎に展望し、文化の継承、歴史認識の生成にかんする新たな視座の提起を目指す。

所謂正史が『日本三代実録』で終わった後の歴史記述の問題については、歴史学の分野で、私撰国史にかんする研究成果がないわけではないが、研究代表者は、これまでの研究活動をとおして、『源氏物語』享受の流れのなかで、とくに中世期、この作品が物語でありながら、歴史的事実のように見なされ、先例として機能するようになってゆく状況を指摘してきた。それについて、記録類を調査し、さらに、『河海抄』を中心とする『源氏物語』注釈書が、中世、近世の歴史認識の形成に深く関与しているのではないかという見通しを得るに至った。研究代表者はこれまで、物語の歴史化の事例が認められるのは中世までと考えていたが、本研究課題を企図する過程の研究を通して、近世の、部類、辞書類、広く流布した注釈書類(たとえば、『三教指帰』注など)に、『河海抄』の記事が『源氏物語』注釈書であることからまったく離れて、歴史や、ことの起源にかんする記事として引用されている事例を確認した。その研究によって、この書が『源氏物語』注釈という枠を超えて生きてゆくことの意味の大きさをあらためて確信している。

具体的には、近世末期の士族の師弟の教育の場において、本来は『源氏物語』注釈書である『河海抄』が、類書のように用いられ、役を果たしていたことを現代に伝える『河海抄類字』の存在に注目し、前近代までの人々の知の基盤としての『源氏物語』注釈史を捉えなおす研究を、文献学的な問題、学問の枠組みの問題もあわせ、より広汎に展望し、文化の継承、歴史認識の生成にかんする新たな視座の提起を目指す。

## 3. 研究の方法

研究の全体をつうじて、物語の注釈が史実によってなされることについて、六国史後、正史を持たなかった日本において、歴史認識はどのように構成されていったかという問題を、本課題の基盤となる問いかけとして研究をすすめる。

A. 年代記類を中心とする私撰国史生成の問題に注目した、中世、近世の歴史認識の生成にかんする基礎的研究。

B. 『河海抄』の諸本状況にかんする文献学的研究。

C. 近世期に多く用いられた年代記・重宝記類および『源氏物語』以外の作品の注釈史に注目した教養の枠組みの継承にかんする研究。

D. 『源氏物語』注釈としては『花鳥余情』の方向性が後の研究にうけつがれ、『河海抄』の注が顧みられなくなってゆくなかで、『源氏物語』とはまったくかわらない世界でこの書が伝承されてゆくことにかんする研究。

さらに具体的にのべる。

「研究の方法 A」については、『河海抄』と同時代の、年代記類をふくむ私撰国史を中心にとりあげて考察する。『河海抄』に認められる傾向として、起源への興味、初例探求への志向を指摘することができるが、それは同時代の私撰国史、さらに近世の重宝記類にいたるまでの記述の特質としても認められるものである。ひとつの歴史認識の傾向とすることができるが、それが『源氏物語』の先例化にどのようにかわかってゆくかを考察する。

また、『河海抄』に引用される文献のなかで、とくに目を引く頻度であられる「日本紀」の問題について考察する。これは、「研究の方法 C」および、「研究方法 D」とも関連するが、『河海抄』の「日本紀」が、とくに近世期、どのような世界にひろがっていることを具体的にたしかめる。

『河海抄』所引歴史記述の問題については、研究の方法 A から D 全体をとおして考察するが、とくに C、D において、『源氏物語』注釈としては終焉した『河海抄』が生きた具体的な空間を展望する問題提起を旨とする。具体的には、従来の『源氏物語』注釈研究では、私的な手控えが偶然残ったものとしてほとんど注目されることのなかった『河海抄類字』をとりあげ、これを、近世期、『河海抄』が『源氏物語』注釈であることからまったく離れ、士族の師弟の教育の現場で、史上の例や有職故実、また和歌や、由緒ある言葉など、教養の基盤を身につけるための、いわば、「王朝文化事典」のように用いられていた状況を現代に伝える書として、諸本研究等、たち遅れていた基礎研究から始発させる。

さらにその成果を、年代記・重宝記類に認められる、時間軸上に部類的な要素を捉え出す発想の問題に繋いでゆく。それは、『河海抄』と共通するばかりでなく、実際に部類の類に『河海抄』は引用されている。年代記類のつくり出した歴史のなかで『河海抄』がどのように生きていったかという視座から見たとき、従来、既存の歴史書の再構成であるとして、歴史学の分野においてほとんど顧みられることの少なかった年代記類、重宝記類の新たな位置づけを提案し得る。

「研究の方法 B」については、善本はないと指摘される『河海抄』の特異な異文状況が、同時代の歴史認識の問題と不可分に生じたものであることを解明する研究として、日本ではじめて出版文化を育てた近世の文化的達成のなかであられた、『源氏物語』本文を全文あげた注釈書、『首書源氏物語』、『湖月抄』に注目し、前代の注釈書類がどのようにうけつがれ、またそこで切り捨てられているものはなにかという問題を考察する。さらに、「研究の方法 C」、「研究の方法 D」の研究と関連させながら、和語に漢語をあてる注に注目し、契沖、賀茂真淵と、本居宣長とでは、注の意味の見だし方が異なることを指摘し、『河海抄類字』を生むような空間との接点の問題を展望する。

これまで、『源氏物語』以外の注釈書にも目をやり、『三教指帰』およびその注釈史が『源氏物語』注釈史と緊密な接点をもつことを指摘、包括的、総合的に『源氏物語』の生きた空間、注釈史がつくってきたものを思想的に問うところみを継続してきたが、古い段階の『三教指帰』注釈書（『三教勸注抄』、『三教指帰注』、『三教指帰注抄』等）と『河海抄』とのあいだに、直接的と推測される影響関係があることを確認し、さらに考察をすすめる。対象となる作品がまったく異なるジャンルであるために従来注目されることのなかった問題であるという点は、同時代の歴史認識生成の現場的な資料として『河海抄』に注目する本研究の基盤と軌を一にするが、所謂ジャンル認識の背景にある近代以降の知的地図の偏りへの認識もふくめ、今後も問いつづけてゆくべき問題である。

#### 4. 研究成果

本研究課題におけるおもな研究成果報告は、末尾にまとめて記す、論文 4 件、外国語による学会発表 1 件と、その文書化の 1 件、計 6 件である。

以下、具体的に記す。

論文「『河海抄類字』について 『河海抄』のゆくえ」は、「3. 研究の方法」の C、D に記した研究の成果である。科学研究補助金（課題番号 16K02358）の支援による研究成果、『河海抄』の注の終焉、『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室、2017 年 12 月）を承け、『源氏物語』注釈としては、一条兼良『花鳥余情』の方法、方向性が、近代以降までうけつがれてきた状況のなかで、『河海抄』が生きた空間を具体的に探求するところみとして『河海抄類字』に注目した研究である。『源氏物語』注釈としては終焉した『河海抄』が、士族の師弟の教育の現場で役を果たしていたことをめぐる研究は今後も継続してゆく。

論文「漢字世界のなかの『源氏物語』注釈」は、『源氏物語』とはまったく異なる『三国志』研究の専門学会からの依頼論文として執筆したもので、「3. 研究の方法」の A および C にかんする成果である。舶載のものもふくむ中世に流布していた字書類に注目し、『河海抄』に特徴的な、和語に漢字をあて、出典を記す注が、古い段階の『節用集』に『河海抄』を典拠として引用

された例が見られることを指摘、さらにそのような注が古字書、中世の言葉にかんする研究世界でどのようなひろがりをつくってゆくか、「研究の方法 A」の成果との連関を確保しながら、具体的にあきらかにすることをこころみた成果である。

論文「『河海抄』の「日本紀」と『河海抄類字』」は、上記二つの論文の研究成果を承け、『源氏物語』注釈であることを離れて士族の師弟教育の場で用いられていた『河海抄』の問題を、「日本紀」に注目して考察し、日本文学でも、歴史学でも、未開拓の部分の多い研究分野である年代記類の問題に繋ぎ、近代以前の人々の常識、教養の生成、獲得の現場を問うこころみである。

くり返しているように、近時、『河海抄』は『源氏物語』注釈書としての意味にとどまらない、人文学全体にわたる多種多様な価値をもつことが注目されるようになり、入念な基礎研究に支えられたたしかな成果を示す責務を実感するなかで、外国語による成果報告を行ったのが、“Annotation and Practice of Reading:The Tale of Genji and Kakaisho”である。研究代表者はこれまでも、科学研究補助金(課題番号 25370203)の支援をうけながら、中国からの国際以来論文「『源氏物語』の注釈史について」を執筆するなど、グローバル化された世界の学問レベルで責を果たす成果公表を行っており、今後も継続してゆきたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

### [論文](計3件)

1. 吉森佳奈子、「『河海抄』の「日本紀」と『河海抄類字』」「むらさき」(紫式部学会)第60輯、2023年、pp.56-61、査読無(依頼執筆)

2. 吉森佳奈子、「漢字世界のなかの『源氏物語』注釈」『大上正美先生傘寿記念 三国志論集』(三国志学会)2023年、pp.375-392、査読無(依頼執筆)

3. 2020年6月「『河海抄類字』について 『河海抄』のゆくえ」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会)第97巻6号、通巻1159号、2020年、pp.35-48、査読有

### [口頭発表および論文](計1件)

1. Kanako Yoshimori, Annotation and Practice of Reading:The Tale of Genji and Kakaisho, Proceedings of 2020 IAFOR(The International Academic Forum) ,The Asian Conference on Cultural Studies(ACCS2020) [papers.iafor.org/submission57745/](https://papers.iafor.org/submission57745/)、6pages【PDF版】、2020年7月。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉森 佳奈子	4. 巻 60
2. 論文標題 『河海抄』の「日本紀」と『河海抄類字』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 紫式部学会『むらさき』	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉森 佳奈子	4. 巻 97
2. 論文標題 『河海抄類字』について－『河海抄』のゆくえ－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語と国文学（東京大学国語国文学会）	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanao Yoshimori	4. 巻 20
2. 論文標題 Annotation and Practice of Reading:The Tale of Genji and Kakaisho	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 papers.iafor.org/submission57745/	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kanao Yoshimori
2. 発表標題 Annotation and Practice of Reading:The Tale of Genji and Kakaisho
3. 学会等名 The International Academic Forum（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三国志学会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 500
3. 書名 三国志論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------